

# ベトナムマンガの歴史と未来

日本のマンガが大人気のベトナム。でも最初から日本のマンガがあったわけではないはず。というわけで、今回のクルヴィエットはベトナムでマンガがどのように浸透していったか、その歴史と変遷、そして未来について調査してみました!

撮影／グエン・タン・ファット(Nguyen Tan Phat)



イマドキのベトナム新人類



## ベトナムマンガの黎明期 1930年～1975年

ベトナムに初めて“マンガ”が入ってきたのは1920～30年代。まだベトナム北部をフランスが統治していた時代に、フランス人によってもたらされたといわれる。1932年には、ベトナム人作家によるマンガが雑誌の付録として販売された。北部では昔ながらのベトナムの絵に説明を付けた、いわゆる風刺マンガが多くなったが、当時の識字率は5%程度。マンガは主に知識人の間で親しまれていた。また第一次インドシナ戦争後、アメリカの影響を強く受けている南部では、アメリカンコミック風の現代的なマンガが人気だった。一方で、マンガは南北の双方で軍事的な宣伝の道具として巧みに利用されていた。

1975年、ベトナム戦争終結により南北が統一。南部で生まれた書籍や新聞、マンガなどはすべて排斥され、北部からの軍事、伝説、歴史などをテーマにしたマンガのみが出回り、人びとのマンガに対する関心も急激に薄れてしまう。

## 転換期と大事件！? 1986年～1992年

そんなベトナムに大きな転機が訪れる。1986年に実施されたドイモイ(Doi Moi／刷新)政策により、多くの国の文化がベトナムに流入。その中には当然マンガもあった。また、当時は著作権に対する法整備がされておらず、海外の書籍やマンガが違法に複製され、広く流通していく。結果的にこのことが、ベトナムのマンガ市場を大きく成長させることになる。日本のマンガは80年代末に入ってきたようだが、当時はアメコミが主流で、あまり人気はなかった。

しかしそんなベトナムのマンガ界に大事件が起こる。1992年に「ドラえもん」が登場したのだ。翻訳・出版された「ドラえもん」はベトナム国内で大ヒットとなり、その人気を受け多くの出版社がぞぞつて日本のマンガを翻訳し出版するようになった。日本のマンガは、90年代になってようやくベトナムで注目されるようになった。



### ベトナム人マンガ家紹介①

#### ベトナムマンガの父 グエン・フン・ラン(Nguyen Hung Lan)

1956年サイゴン(現ホーチミン市)生まれ。南北統一後、大学を中退しパリア・ヴァンタウ省へ移り住みゴムの木栽培をする。1987年に『月へ行く人／Nguoi Len Mat Trang』という海外文学をマンガにした作品でデビュー。ベトナムの伝説を扱ったものから現代的なものまで、10以上の作品を生み出し、700冊以上のマンガを世に送り出している。大ヒット作の『勇者ヘスマン／Dung Si Hesman』が代表作。

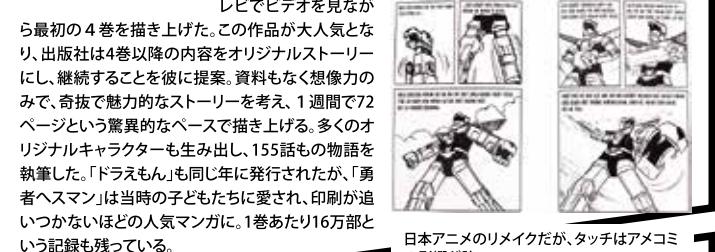


#### 『勇者ヘスマン／Dung Si Hesman』

Arusという惑星を守るために、5体のライオン型ロボットを操縦する5人の戦士が活躍するロボットマンガ。

もともとは“百獸王ゴライオン”(1981年)と“機甲艦隊ダイラガーXV”(1982年)というまったく関連のない日本のテレビアニメを、アメリカの会社が強引に統合させ“Voltron - Defender of the Universe”という名前でアメリカで放映していたテレビアニメシリーズ。

1992年、ラン氏はこのアニメビデオ2本を渡され、マンガとしてリメイクするよう依頼を受けた。「ヘスマン」とは“He is man”をもじって彼が命名したもの。当時、極貧生活を送っていた彼は、夜間に発電機を2時間だけ使い、白黒テレビでビデオを見ながら



ら最初の4巻を描き上げた。この作品が大人気となり、出版社は4巻以降の内容をオリジナルストーリーにし、継続することを彼に提案。資料もなく想像力のみで、奇抜で魅力的なストーリーを考え、1週間で72ページという驚異的なペースで描き上げる。多くのオリジナルキャラクターも生み出し、155話もの物語を執筆した。「ドラえもん」も同じ年に発行されたが、「勇者ヘスマン」は当時の子どもたちに愛され、印刷が追いつかないほどの人気マンガに。1巻あたり16万部という記録も残っている。

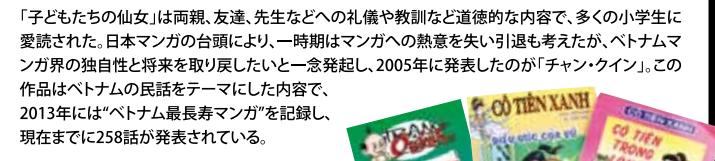


### ベトナム人マンガ家紹介②

#### 最も多くのマンガを描いたマンガ家 キム・カイン(Kim Khanh)

本名はグエン・バン・ファン(Nguyen Van Huong)。1953年ニヤチャン生まれ。1989年に通訳を辞め、キム・カインと名乗りマンガ家に。現在までの26年間に50の作品、1000話もの物語を生み出した。

#### 『子どもたちの仙女／Co Tien Xanh』と 『チャン・クイン／Trang Quynh』



「子どもたちの仙女」は両親、友達、先生などへの礼儀や教訓など道徳的内容で、多くの小学生に愛読された。日本マンガの台頭により、一時期はマンガへの熱意を失い引退も考えたが、ベトナムマンガ界の独自性と将来を取り戻したいと一念発起し、2005年に発表したのが「チャン・クイン」。この作品はベトナムの民話をテーマにした内容で、2013年には「ベトナム最長寿マンガ」を記録し、現在までに258話が発表されている。

『子どもたちの仙女』(右・中)も息の長い作品。左は『チャン・クイン』

## 日本マンガ時代の幕開けとベトナムマンガの危機 1992年～2005年

『ドラえもん』は多くのベトナム人の子どもを夢中にさせた。これを機に『美少女戦士セーラームーン』『ドラゴンボール』『ちびまる子ちゃん』など、日本のマンガが次々とベトナムにだれ込んでくる。繊細な絵と魅力的なストーリーを持つ日本のマンガは、都会を中心に瞬く間に広がり、ベトナムマンガ界を独占。日本のマンガを読んで育った世代は、より日本の文化や歴史に親しみを感じるようになった。

その一方で、日本のマンガを翻訳し印刷するだけで多くの利益が得られる出版社は、発展途上にある国内のマンガ家たちに投資や執筆依頼をすることがほとんど無くなかった。熱

意や可能性を削がれた国内のマンガ家たちの中には、筆を折る者も現れるなど、この10年間にヒットしたベトナムマンガが1本も無いという危機的状況に。それほどまでに、日本のマンガはベトナムに大きな旋風を巻き起こしたのである。

しかし、そんな状況の中、国内マンガを発展させようという動きが2000年頃から芽生えはじめる。またベトナムは、2004年に文学や美術などの著作物の保護に関する『ベルヌ条約』に加盟。これにより、日本など海外作品の出版には正式に著作権を取得する必要に迫られたことも追い風となった。



日本のマンガを読んでいる子どもたち



### ベトナム人マンガ家紹介③

#### ベトナム文化を広める使命を自らに課す



PHANTHI  
PHANTHI Media Education & Entertainment Co. Ltd.

2000年6月にファン・ティ・ミー・ハイン(Phan Thi My Hanh)氏が設立。日本のマンガの出版を手がけつつ、ベトナム国内初の子ども向け本の制作・出版をする会社として成長する。現在では、クオリティの高い教育本を出版する会社として、保護者や教育機関からの大きな信頼を得ている。また、特定のマンガ家の作品ではなく、制作チームがマンガを作るというプロダクション制を採用しているのも大きな特徴だ。



#### ベトナムマンガ復活の礎となった作品 『ベトナムの神童／Than Dong Dat Viet』

2002年2月に出版され、ベトナムマンガ界を再生に導いた作品といわれる。「なぜベトナムのマンガは自社が翻訳・出版している日本のマンガのように、人々を楽しませることができないのか?」というハイン氏の疑問がこの作品誕生のきっかけだった。彼女はどうしたらベトナムのマンガがヒットするのかを真剣に考え、日本のマンガを徹底的に研究する。そして日本のマンガは常に主人公が存在し、しっかりとストーリー展開であること。また丸みを帯び、幼く愛らしい印象を持つキャラクターが多く登場することに気づく。そこで、そのような条件を満たし、かつベトナムらしいマンガを出版しようと思いつ立つ。こうしてベトナムの田舎や宮廷を舞台に、ベトナムらしいユーモアと知恵を併せ持つ少年“チャン・ティー(Trang Ti)”が活躍するマンガ『ベトナムの神童』のアイデアが生まれた。

このマンガは、ベトナム各地の文化や習慣、祭礼などが盛り込まれており、ベトナムらしさを全面に押し出したストーリーとなっていた。彼女は各出版社を回り、出版の話を持ち掛けたが、どこも“ベトナムのマンガが売れるわけがない”と断られてしまう。このマンガの成功を確信していた彼女は、自宅を売って資金を工面し『ベトナムの神童』を自費出版した。出版後は自ら書店や路面の新聞スタンドを訪問し、このマンガを並べてもうよう営業に回った。最初は多くの書店に断られたものの、粘り強い努力が実り、このマンガの名は徐々に幼い子どもを持つ親達の中で評判となり、大人気となった。



キャラクターの設定はベトナムの昔の子どもをイメージ。特徴である桃のような髪型や、昔の子どものアヘアスタイルだ。アメコミの描き方に日本風のキャラクターをミックス



『チュオンサー諸島とホアン・サー諸島』。ベトナムと中国の間で起こっている東海の領土問題を、子どもたちにも理解しやすいようにした政治的な内容の作品もある



『ベトナムの神童』制作風景。コンピューターによつて描かれていく



ハイン氏、「日本のマンガからは、本当に多くのことを学びました」



COMIC MEDIA ACADEMY  
Comic Media Academy Vietnam

現在ベトナムでは、マンガやアニメ、ゲームなどの分野を希望する人が増えている。しかし、実際はマンガ制作の基礎知識を持つ人材はまだ少ないのが現状だ。そこで、ファンティ社は2014年8月に「コミックメディアアカデミー・ベトナム」というマンガ・アニメ・ゲーム制作のプロを育てる専門学校を開校。マンガの概念や種類、研究、ストーリー作りや構成などを教えていく。またクリエイター育成だけではなく、ベトナムのマンガ産業に携わる人材育成にも力を入れている。近い将来、ここを卒業したマンガ家やアニメーター、ゲームプログラマーが、ベトナムのマンガ産業を引っ張っていくかもしれません。

## 脱日本マンガへのチャレンジ 2006年～2013年



ベトナム人マンガ家紹介④

### ブロ／B.R.O

左から、編集担当のアン・トゥアン(Anh Tuan)さん(1986年生まれ)、作画担当のキエウ・オアン(Kieu Oanh)さん(1984年生まれ)、マンガ原作担当のニヤット・グエン(Nhat Nguyen)さん(1986年生まれ)。

日本マンガのファンだった3人は、マンガ公開ウェブサイトで知り合い、2005年に「B.R.O」(Black・Red・Orangeという3人の好きなカラー)を設立。ファンティ社のマンガ募集に応募し採用される。2012年、ファンティ社発行・B.R.O制作の『名作マンガ／Truyen Tranh Danh Tac』が東京外國語大学大学院地域文化研究科の新江利彦氏の目に留まり、同作品を日本語に訳して、日本で発行することを提案される。現在のベトナムマンガ界のトップを走るクリエイターチーム。

若い読者からの要望に応え、ファンティ社はベトナム初のマンガ雑誌『ベトナムの神童ファンクラブ』を2004年3月に創刊。読者から寄せられた優秀な作品を掲載することにしたが、投稿者の多くが10代半ばの若者であり、ほとんどが日本のマンガの模倣で、内容もワンパターンで幼稚な作品が多かった。

ただ、この時期はマンガの質よりも、マンガを描くことが若者との間でブームとなっていた。マンガ雑誌、マンガ交流クラブ、マンガ公開ウェブサイト(Manga Forum)も次々と生まれたが、2007年半ば頃からブームは沈静化する。

その後数年間は静かな状態だったベトナムのマンガ界だったが、その沈黙を破ったのは、ホーチミン市の「ブロ／B.R.O」とハノイの「フォンズオンコミック／Phong Duong Comic」という2つのマンガ制作グループだった。ブームの時に数多くのマンガを寄稿して力を抜け、ブームが去ったあとも「ベトナムのマンガを盛り上げたい」と、マンガを描き続け、2011年頃に注目されるようになった。この2つのグループのように、2007年以降は、美術学校へ通いイラストやストーリー構成について専門的な知識を身につけたマンガ家が登場するようになってくる。



『オレンジ／Orange』

ベトナムでスラムダンクが大流行した2004～2007年にベトナムのマンガ雑誌に連載されたベトナム初のバスケットボールをテーマにした青春マンガ。2011年に全2巻の単行本を出版。バスケットボールが好きで、プレーヤーとしても一流なのに、学校ではバスケットボールに関心がないふりをする主人公。湖でたたずむバジャマ姿の老人やバイクの上で寝そべるセオムのおじさんなど、ベトナムの日常風景も巧みに描かれている。

『竜神将／Long Than Tuong』

フォンズオンコミックのデビュー作。2004年にマンガ雑誌で連載していたが、その雑誌が廃刊となり連載終了。2014年に自費出版でリバイバルを計画、ベトナムマンガ初のクラウドファンディングで資金調達を実施し、2ヶ月で3000万VNDを集め出版に成功する。ストーリーは、阮とモンゴルに侵攻されていたチャン(陳)朝時代のベトナムが舞台。ある村で凄惨な虐殺事件が起こるが、犯人は不明のまま。そして時は流れ2014年、6歳の女の子が突然その事件の記憶を語りだすという、ベトナムの歴史を題材にした独自のストーリー展開。ベトナム人にとっては、歴史の教科書で学んだことが出てくるため、話に入りやすくリバイバルで大人気。また、内容は10年前と同じだが、絵のタッチが大きく変わり、20代以上の大人を対象とした劇画風タッチになっている。



ベトナム人マンガ家紹介⑤

### Phong Duong Comic フォンズオンコミック

左から、作画担当のグエン・タイン・ファン(Nguyen Thanh Phong)さん(1986年生まれ)、マンガ原作担当のグエン・カイン・ズオン(Nguyen Khanh Duong)さん(1986年生まれ)。

2004年に『竜神将／Long Than Tuong』でデビュー。その後多くの雑誌に連載を持つようになり、今ではベトナムで最も人気のあるマンガチームのひとつとなった。短編マンガが多く、大人向けのシユールなギャグマンガやシリアルなストーリー展開のマンガや絵本など、その作風は幅が広い。日本をはじめ各国のマンガ賞を受賞している。代表作に約120の絵が収録された絵本『ただれ頭の殺人者／Sat Thu Dau Mung Mu』などがある。



## ウェブコミックが大ブームで 新時代へ突入！ 2014年～2015年

今、ベトナムではインターネットやソーシャルネットワークで有名になったマンガ家やイラストレーターが話題になっている。その発端となったのが、2014年末に登場したウェブサイト『コミコラ／Comicola』だ。

10年以上のマンガ業界での経験を持つ、フォンズオンコミックのカイン・ズオン氏と、B.R.Oのアン・トゥアン氏によって設立されたベトナム最大のコミックサイトで、若手マンガ家の作品が無料で読み放題。さらに大きな特徴は、フォンズオンコミックも採用したクラウドファンディングシステムという点だ。読者がこのサイトにアップされているマンガを閲覧し、気に入った作品があれば、その作者に投資をする。多くの支持を得たマンガは、直接出版社から連絡があるほか、読者から集まつたお金で出版することもできる。

それまでは、出版社のOKなしで出版は不可能であり、売り上げが見込めないベトナムマンガにお金を出す出版社は少なく、若手のマンガ家たちが世に出るチャンスが摘み取られていた。しかし、「ベトナムマンガをもっと盛り上げたい」という思いを持つコミコラを機に、若いマンガ家の作品がインターネット経由で多くのベトナム人の目に留まり、若き才能が次々とデビューしている。

コミコラの登場は、日本や外国マンガのコピーから脱却し、ベトナムが独自のマンガへの道を歩みはじめた証しならぬかもしれない。

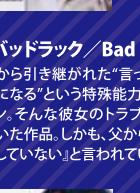
Comicola: <http://comicola.com>

### コミコラで人気爆発の マンガBest 3!



『血液型O／Nhom Mau O』

OJとは、ベトナムの優秀な高校生が出演するクイズ番組『オリンピア』の頭文字で、実在するテレビ番組。驚異的な頭脳を持つ主人公を中心展開する、笑い・涙・胸キュンありの学園ストーリー。



『パッドラック／Bad Luck』

父から引き継がれた“言ったことが絶対現実になる”という特殊能力を持つ女子高生アン。そんな彼女のトラブル続きの日常を描いた作品。しかも、父からは「40年後も結婚していない」と言われている(笑)。



『超短い話／Truyen Cuc Ngan』

有名なマンガ同士をコラボした、1ページにつき1話完結型マンガ。名探偵コナン×白雪姫の話では、白雪姫が魔女の服装や持ち物から、何か悪企みがあると推理。結果、りんごを食べずに助かったというオチ。



ベトナム人マンガ家紹介⑥

### Facebookから登場したマンガ家 ファン・キム・タイン／Phan Kim Thanh

大学ではファッションデザインを専攻。昔から日本マンガの大ファンで、2013年頃から自作のマンガをFacebookに投稿し、話題を呼ぶ。プロのマンガ家だという意識ではなく、純粋にマンガが好きで楽しくマンガを描いていたいというのが彼女のスタンス。

### 『黄色ちゃん』旋風巻き起こる！ 各国を擬人化したマンガ 『黄色ちゃんのいらん話／Chuyen Tao Lao Cua Vang Vang』

Facebookで話題になったのがきっかけで出版社から声がかかり、発行1日で3000部の売り上げを記録したマンガ。世界各国を擬人化し特徴を捉えたキャラクターが人気で、「黄色ちゃん」はベトナムを表すキャラで、あどけなくて楽天的。ちなみに、日本は鋭い目つきの「ロボット」、中国は危険な「パンダちゃん」。この親しみやすいキャラクターを使って、ベトナムと各国との関係や政治について面白おかしく描く。日本の日丸屋秀和の『Axis powers ヘタリア』とコンセプトは同じ。



実際に地方の農村で起った事件を元にした話や、やんわりと政府を揶揄するなど、なかなか風刺が効いた内容は大人でも十分楽しめる



### 今、ベトナムの Facebookで 最も人気のある マンガ

### 『七色うさぎ／Tho Bay Mau』

上のコマ：「あなたが大好きなの」「ボクもだよ」下のコマ：「あなたも私が好きなのね。ふふ」「いや、ボクはボクが大好きなんだ」

### 『はしゃぐあづき／Dau Do Tung Tang』

上のコマ：「もうそばにはいられないけど、ずっとあなたのことを祈っている。」下のコマ：「そう、あなたの人生が荒れ狂い、平和な日が1日もないことを。」



今回の「ベトナムのマンガ」がテーマに決まってから、周りのベトナム人の友達や同僚にベトナムのマンガについて聞いてみた。でもほとんどの人が「えっ、なんでベトナムマンガ？ ネタ切れ？(笑)」とか「ベトナムのマンガといえば『ベトナムの神童』くらいじゃない？」という答えが…。ちょっとがっかりした私は、インターネットで調べてみると「ほら、ベトナムマンガって面白い情報が多い！ ちゃんと歴史もあるんだ！」と大発見。意外と情報が多かったから本当は2ページだったのを4ページにしました(笑)。

ベトナム人がベトナムマンガを知らない、興味がない、というのが今の実情。でも、若いマンガ家たちは、そんな状況を打破すべく、質の高い作品を送りだそうとがんばっている。それが彼らの最大のミッション。そして私のミッションは、そんな彼らを信してあげること！